

親鸞聖人七五〇回大遠忌
正尊寺庫裡新築落慶

法要記念誌

平成二十四年四月二十八日・二十九日



法園山 正尊寺

岐阜県本巣市曾井中島 1 5 9 2

電話0581-34-2018 Fax0581-34-3183

URL <http://www.shoninji.or.jp>

宗祖親鸞聖人七五〇回大遠忌法要厳修にあたって

正尊寺 第十八代住職 杉山雲来



平成二十四年一月十六日は宗祖親鸞聖人の七五〇回忌にあたり、本山本願寺では盛大に大遠忌法要御正當が厳修されました。

御門主様はこの度の法要に際し御消息で

「聖人のご苦勞をしのび、お徳を讃えるとともに、浄土真宗のみ教えを深く受けとめ、混迷の時代を導く灯火として、広く伝わるよう努めたい。」

と決意を持って御親修になりました。正尊寺におきましても宗祖聖人の御遺徳を偲び、門信徒一丸となって大遠忌法要を勤めるよう六年の歳月をかけ諸計画を立て準備して参りました。

その計画の柱は老朽化し教化施設として不相応な庫裡の新築を記念事業として、門信徒の懇念と役員委員設計施工各位の叡智を結集しすすめて参り、おかげをもつて平成二十二年十二月末には立派な新庫裡が竣工いたしました。

新庫裡は完成以来一年余、今御法要を厳修するまで様々な行事において活用され、お齋・会食・休憩おやつなどゆったり快適に過ごせるようになり、法要行事への参加者も増加しお寺参りへの喜びの聲が響くようになってきました。

門信徒の皆様には今法要記念事業を完遂するため物心両面に多大なご苦勞をおかけしましたが、正尊寺がここに再建され五〇〇年、先祖代々の大切に護り継がれた愛山護法の伝統を守り伝える環境が整い、祖師聖人のご教化に感謝しつつ七五〇回大遠忌法要を厳修する運びとなりましたこと共々慶びたいと思います。

ふり返りみればこの六年間に正尊寺を支えて頂いた総代さんや多くのご門徒方、そして前住職が完成を見ること無くお浄土へ往かれ、ともに御祝いできない寂しさはありますが、先人の方々から大きな力を頂きこころで来られたこと、そして現総代役員の皆様方に多大なご苦勞をお掛けして、宗祖の大遠忌法要が円成できますこと心より御礼申し上げます。

大遠忌法要をお迎えして

正尊寺責任役員 森田 力

(写真)



この程、本願寺において大遠忌法要が厳修されるにあたり、正尊寺におきまして宗祖親鸞聖人の御遺徳を偲び、門信徒の皆様と役員委員の方々の叡智により、立派な庫裡が完成いたしました。

これも、正尊寺を私どもの子孫へ伝えようとする、皆様の深い願いによって成しえたものと推察いたす次第であります。

これから正尊寺門信徒全員がこの素晴らしい庫裡に親しみ、あやかりそして本堂に座り、み教えを聴聞しお念仏と共に人生を送り、このみ教えを永遠に子や孫にと深く伝えることを念願するものであります。

茲に、あらためてこのたび門信徒皆様の記念事業完遂のため物心両面にいたる多額の浄財をご寄進賜りました誠意と懇心にお一人おひとりに対して責任役員として言葉足らずの蕪辞ではあります、重ねて深く御礼を申し上げますのでございます。

前任職様はじめ門信徒様において庫裡完成を見ることがなくお浄土へ往かれました各位を思うときお寂しい限りでございます。この立派な庫裡が荘厳さの中に門信徒の皆さまはじめ若い方々に、気楽に立ち寄っていただき心のよりどころとなるよう、切望いたすものであります。

また、ご住職ご夫妻様にはお子様も立派に成長され、ご家族揃って深く地域社会のご奉仕の一念にかねがね敬服いたしているところであり、どうかご住職様には正尊寺のますますのご繁栄を念願申し上げます。

併せて門信徒の皆様には、わが法園山正尊寺の護寺運営に一層ご尽力を賜りますよう伏してお願いたしますと共に、門信徒のご親族皆様のご自愛ご健勝を念じ申し上げます。

大遠忌記念事業完遂して

正尊寺門信徒会 本部委員長 林隆一

(写真)



平成二十三年四月より、宗祖七五〇回大遠忌法要が厳修されるにあたり、六年前より住職及び本部役員等の方々が計画され、平成十八年の臨時役員総会で、満場一致議決された、記念法要と庫裡・書院浴室の新築を準備してきました。

計画していただいた多くの役員の方々が浄土へ往かれたあと、旧役員の方々のお教えを受け、新役員として、門徒全員に参加してもらいたい。特に、庫裡については『門信徒の皆さんが、明るく、気楽に声かけて訪れていただけの庫裡であって、会館の多様性もかねそなえた建物。一方、心のよりどころであって荘厳さも、求めていきたい。』こんな住職さんの思いを充分にくみ、建築委員会を開き、幾度と協議を重ね、住職さんのアイデアも多く取り入れた実施計画図案が完了した後は、一気に業者選定、着工と順調に竣工に向かって進みました。

時代は大変経済状況がおもわしくない中、昨年は、東日本大震災に会いましたけど門徒懇志、特別懇志を何をおいても寺のためと御協力いただき、ただただ心の中で、常に合掌の御礼でした。

大計画から実行、そして最後の一步手前で浄土に向かわれた前任職様の葬儀が、庫裡で行う最初の行事として執り行わさせて頂いたことも、前任職様に深く深く感謝いたします。

役員で、大遠忌法要前に、浄土向かわれた各位に見守られ今日あることも忘れてはいけないと思っています。

大遠忌法要・庫裡新築落慶法要に携わっていただいた、全各位へお礼申し上げ、今後も今まで以上に正尊寺護寺にご尽力頂きたくお願い申し上げます。

記念誌発刊にあたって

正尊寺門信徒会副委員長 小川賢司



礼申し上げます。

建築委員会発足から二年余、着工から十一月の短い工期でしたが、近在には見られない純木造の二〇〇坪を超える、威風堂々とした素晴らしい庫裡が完成したわけでございます。

この庫裡が完成するまでの間、ご住職は工事の様子などを写真に撮りホームページで公開されており、正尊寺門徒が一丸となり、建築業者さんも一生懸命施工されたことがよくわかるとの評判がたつておりました。

役員会でもそれらの写真をつかって、誰でもが見られる写真集として記念に残せないかという提案がなされ、五万枚以上撮られた工事写真の中から厳選し一冊に纏め、ここに法要記念誌として発刊の運びとなりました。

庫裡の新築計画から完成までの記録を写真集で御覧戴きつつ、門信徒皆様方の血財にて大事業完遂できた『勝縁』と、子・孫末代迄語り継いで戴きたく思う次第でございます。

— 目次 —

3	庫裡建築写真集
4	計画趣意
5	建築委員会
6	手斧初式 <small>ちようなはしめ</small>
7	寺山の伐採
8	北駐車場用水路付け替
9	庭木の移動
10	材料見学
12	旧庫裡お別れ
14	大玄関の曳屋移動
15	起工式
16	基礎工事
18	建て方工事
22	上棟式
24	耐震と泥壁
25	屋根工事
27	造作工事
31	完成写真
34	前任職の葬儀
35	集いのお庫裡写真
36	お勤め
	宗祖讃仰作法〈音楽法要〉
37	頂礼文
38	正信念仏偈
42	和讃・念仏
46	回向文
47	宗祖御消息
48	お寺の行事

庫裡の新築にあたり

建築委員長 青木博司



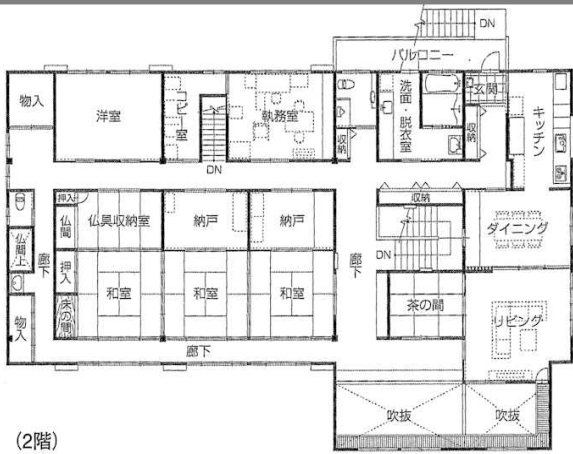
今から百十数年前に旧家を移築して建てられた庫裡は、古くなり屋根瓦のづれによる雨漏りや襖は動かず床鳴りも激しく、最近騒がれている耐震強度の点においても限界に達しているとの判断により、先代役員の方々が庫裡の建替を計画され、私ども現在の役員がそれを引き継ぐことになりました。

役員会では世相と経済の不況と物価の上昇を考え、当初計画より着工を一年早めた平成二十二年一月と定め、何度も建築委員会を開きグラントプランを検討し、設計士を選定して入札による施工業者決定まですすめました。

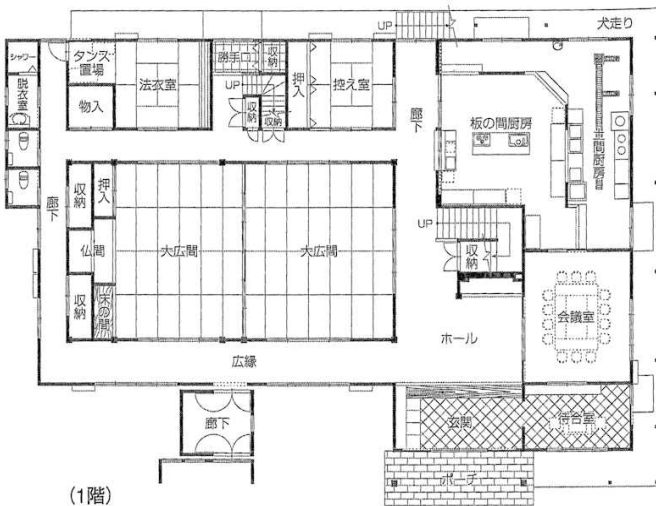
そのため東北大地震の三ヶ月前には完成し、工事遅延や原材料高騰など震災の影響を受けず、最高の技術と材料で歴史に残るような庫裡が完成しました。

施工は本体工事を大野町の丸平建設、書院玄関修復を市内の浅川建設、ともに正尊寺門徒の工務店が県内有力建設業者の入札価格を押さえて請け負ってもらえ、師匠寺の大事業と社長さんから現場の職人さんに至まで、材料を吟味し丁寧な仕事ぶりに建築委員として安心して見届けさせてもらえました。

これも、ご門徒皆様方のお力によって出来たことであり、今後多くの人の集いの場所として利用されることを願うところであります



- 平成18年
 - 4月8日 役員総会に原案諮る
 - 6月17日 臨時総会で計画承認
- 平成19年
 - 4月6日 第1期工事起工(書院浴室増築)
 - 6月15日 書院浴室棟完成
- 平成20年
 - 4月5日 建築委員会発足
工事発注まで20回の委員会で検討
- 平成21年
 - 9月25日 入札業者説明会
 - 10月8日 5社による入札
 - 10月16日 工事契約(本体工事)
 - 11月26日 手斧初め式
- 平成22年
 - 1月16日 旧庫裡解体報告法要
 - 1月20日 着工
 - 2月4日 起工式
 - 4月10日 上棟式
 - 11月12日 前住職逝去
 - 11月29日 工事完了検査
 - 12月15日 完成引渡
 - 12月18日 庫裡仏間入仏法要
 - 12月20日 前住職本葬
- 平成24年
 - 4月28・29日 落慶法要



親鸞聖人七五〇回大遠忌法要計画趣意書

日々これ好日、門信徒の皆さまには真宗法義ご相続の上、報謝の大道をご精進のこととおよろこび申し上げます。

さて、浄土真宗の開祖親鸞聖人は弘長二年（一二六二）九十年の生涯を閉じられ、安樂のお浄土へお遷りになりました。平成二十四年一月十六日には七五〇回目のご命日をお迎えします。ご本山西本願寺では平成二十三年四月より宗祖七五〇回大遠忌法要が厳修され、それにともない宗派では長期振興計画を策定し、その御遠忌の準備に入りました。

また、我々の別院、岐阜御坊も諸施設が老朽化し、この御遠忌を期に修繕をする計画を策定中でありませす。本山と別院の護寺は門徒として果さなければならぬ責務であります。

そして、正尊寺においても宗祖の五〇年に一度の御遠忌という法事を粗末にすることはできず、何らかの形で門信徒一丸となりお勤めしたいと願ひ、ご本山の法要後、正尊寺でも御遠忌を勤めるべく今から六ヶ年の計画で事業を進めたいと考えました。

この法要を勤めるにあたり記念事業として、庫裏と書院浴室の新築を計画し、概算の計画案を平成十八年度門徒役員総会に上程し、各門徒から広く意見を求め六月十七日臨時役員総会を開催し本計画の是非について審議いたしましたところ、満場一致でこの計画を推進することと議決いたしました。

ご承知の通り、正尊寺庫裏は明治二十四年の濃尾震災で倒壊し、その三年後当座をしのご庫裏として古家を購入移築したもので、それから既に一〇年以上が経過しております。

しかも、農家の古家であったために、お寺の庫裏としての十分な機能を果たせず、法要行事の折にはお取持ちや参詣者に難渋を掛けましたことです。

門信徒皆様にごの趣意にたいし協力が得られたならば、諸行事が円滑に進められ、正尊寺庫裏として孫の代まで誇れるような、機能と風格を供えた伽藍を建立すべく計画を進めて参りたいと考えてます。厳しい社会経済情勢の真つ直中ではありますが、先祖から継承した親鸞聖人のみ教えを孫末代へ伝えていく歴史の担い手として、なにごとご理解を頂き本計画にご協力を賜りますようお願い申し上げます。

合掌

御遠忌法要計画予算

収入	
門徒懇志	105,000,000
15万円×700戸(本山3万円、別院2万円を合)	
特別懇志	70,000,000
その他収入	5,000,000
収入合計	180,000,000

支出	
本山懇志	15,000,000
別院懇志(未定)	15,000,000
書院浴室新設	7,000,000
庫裏新築	133,000,000
正尊寺御遠忌法要費	10,000,000
支出合計	180,000,000

ご懇志についての御依頼

- ・門徒1戸当りの御依頼懇志額は15万円(内5万円は本山と別院懇志)を目標にてお願い致します。
- ・御進納して頂く期間は、平成24年秋までと致したく、それまでに御完納頂ければこの上ございません。
- ・御進納方法については、それぞれの事情もあるかと思ひます。分割でのご進納回数や時期などは各地区やご家庭でお決め頂ければ結構です。

平成十八年七月

門信徒各位

正尊寺住職 杉山雲来
本部委員長 林秀司
地区役員一同



- ・平成3年本堂修復当時の正尊寺全景空撮
- ・明治27年移築建て替えされた旧庫裏
- ・平成18年6月臨時門徒役員総会にて事業案を説明される故林秀司委員長

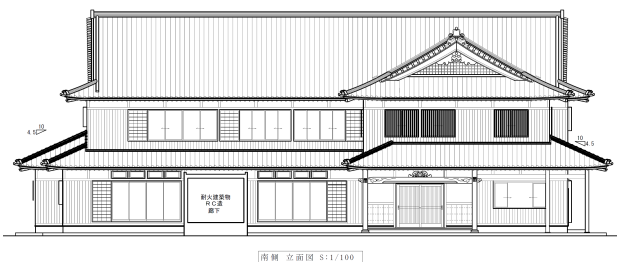
建築委員会



平成20年4月5日
役員総会で庫裡建築委員会が承認され誕生しました。



平成21年10月9日
請負業者選定に至るまで15回の建築委員会を開き細部にわたり検討しました。



庫裡外観のモデルとなったのは、小田原箱根登山鉄道風祭駅にある『鈴廣かまぼこ』博物館に建つ「千世倭樓(ちよわろう)」の書院造りの母屋(もや)です。
仏教壮年会研修旅行で箱根を訪れたとき、昼食会場になった「かまぼこの里」の近くにあり、住職は一目で気に入り夢を膨らませまてきました。



庫裡新築の設計監理は一級建築士事務所IN O・小里悟建築士にお願いしました。
請負業者は県内有力工務店5社による相見積の結果、庫裡本体工事は丸平建設株式会社(1億7280万円)、玄関移設・公衆トイレ増築工事は浅川建設株式会社(1380万円)で、平成21年10月16日に契約しました。
ともに正尊寺門徒の老舗の建設会社、師匠寺の大工事に大きな力をそそいでもらえました。

手斧初式



平成21年11月26日丸平建設本社で正尊寺庫裡新築工事の『手斧初式(ちよなはじめき)』が行われました。伝統的儀式に工事請負関係者と建築委員、総代、仏教婦人会、壮年会の代表が集まり庫裡新築によせる熱い思いを結集しました。



美山の寺山から切り出した桧丸太が会場へ釣り込まれて、伝統の大工道具「手斧(ちよな)」で棟梁がかけ声とともに削り初めの儀式をしました。

この儀式で正尊寺庫裡新築の大作業が本式スタートとなりました。



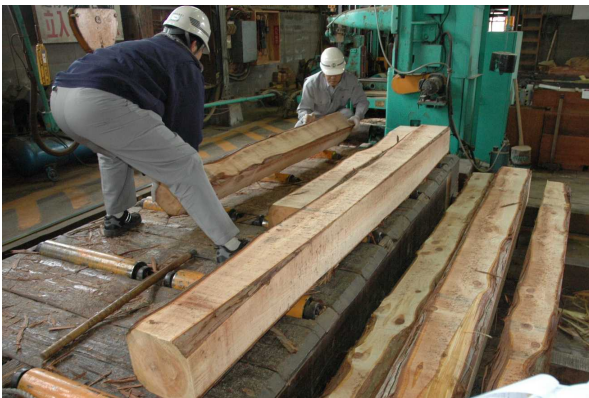
寺山伐採



平成20年11月、山県市美山神崎から更に7 km程山奥に行くと万所(まんどころ)地区があります。数百年その地域の門徒が寺山として管理されてきた山の木を一車分切り出しました。



平成21年1月建築委員会で伐採された寺山材を見分し、建築材に使用できるよう製材し乾燥作業に入ってもらいました。数本を丸太のまま記念木化粧材として使えるよにし、その材が手斧初式に担ぎ込まれ、玄関ホールシンボル柱と吹抜の化粧梁として使われています。



北駐車場



設計段階になり木造庫裡を建設するには旧庫裏より基礎が3m北側にはみ出ることが判明しました。

行政と自治会から許可をもらい、用水路と側道の付替作業を9月から先行して行いました。



この土木工事は遠藤造林株式会社が請負ってもらえ、駐車場として使いやすいように、水路は全て伏せこしの施工で境内地と駐車場が一体化しました。



工事の下請は西郷の高橋重建さん、敷地脇にあった花壇と柿畑も除却し舗装、気持ちよく追加工事に応じてもらえました。



庭木移動



平成21年1月報恩講前には本体工事着工に先がけ、境内庭木の撤去がはじまりました。境内整備は後藤造園さんの受け持ちで、樹木の養生移植、庭石の移動などが行われていきました。



多くの樹木は下川原の後藤造園土場に運ばれ完成後の造営まで一時避難です。



移植最大の難関は樹齢200年以上のモミジ、昨年からの根切りなどの準備がされていましたが、レッカーで掘り出し移動は大変な作業になりました。



材料を見る



丸平建設にて会社役員・担当監督の紹介と説明を受ける本部役員と建築委員



材料見学会に参加した正尊寺関係者の記念撮影



大きな倉庫に広げられた正尊寺庫裡の柱を確認しました

総二階の庫裡を支える25cm×7mの丹波から切り出された桧柱は24本ありました。



ケヤキの大黒柱も仕様帳の太さより一回り以上太く、木肌は美しく性も良く立派です。



二階の大屋根を支える地棟は米松、設計強度の太さは貼ってある白い紙の直径で、使用材は1.5倍以上の太さがあります。



仏教壮年会も材料見学に行き14mの長い地棟に驚きでした。



二階を支える大断面集成材の梁、大広間の天井には厚さ60cm×8mのこの梁が90cm間隔で16本並びます。



52畳の大広間と総二階という在来工法だけでは建築不可能な庫裡、棟梁の墨出しにも気合いが感じられました。



本堂のような勾配の反り屋根、妻の破風の曲線は外観の命です、原寸図を書き棟梁と設計士で細かく打合せをして、水に強く美しい米ヒバで作られました。



大屋根を支える小屋組は5重層、硬い米松ですがコンピューター制御のプレカット機で刻まれ、工期の短縮になるようです。



軒先などの雨が当たるところは米ヒバが使われます。節がまったく無く白く木目の綺麗なヒバ材が大量に用意されていました。



玄関先のケヤキ梁彫刻も専門の職人さんが丹精込めて彫り込んでもらえました。

旧庫裡最後の報恩講



1月14日から3日間、100年以上続いた旧庫裡の明け放たれた広間でのお斎風景。



15日お初夜は親子でお参り、お庫裡でお華束焼いて報恩講のお楽しみ。



報恩講最終日の夕刻には本部委員・建築委員・仏婦役員・報恩講取持門徒、総勢60名が明け放たれた庫裡に集合し、庫裡解体奉告法要がお勤めされました。

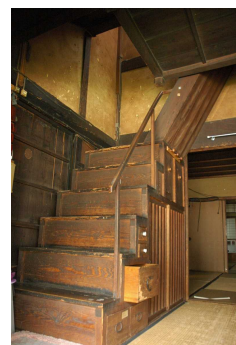


御満座の翌日、仏教壮年会のメンバーが庫裡解体前最後の片付けに馳せ参じてもらえました。片付けが終わり思い出を語りながら旧庫裏最後の会食を楽しみました。

解体開始前夜、子ども達が集まって障子破り大会でも盛り上がりました。



解体作業



平成21年1月19日いよいよ庫裡新築工事着工、解体準備がはじめられました。120年五世代にわたり数え切れないご門徒が出入りした庫裡ともお別れです。



解体では最初に室内の畳や建具が全て運び出されて行きました。



屋根瓦もめくっては集め、まとめてトラックで捨てられていきました。



建具も床も無くなった庫裡は広々として、真っ黒になった柱や桁が哀愁をさそいます。



解体ユンボが入って1週間、1月27日の写真です。
翌28日には庫裡の建物は完全に解体撤去されました。



玄関の曳屋



正尊寺大玄関は大正15年に完成、唐破風瓦葺きの重厚な式台を備えており、今回は浅川建設施工で修復されますが、庫裡の地盤改良と基礎成型を一緒に行うため曳屋をして一時待避をしました。



鋼製のレールが敷かれ、ジャッキアップし鉄棒をコロにして滑るように移動していきました。



東へ15m移動し、直角に南へ15m移動し基礎が出来上がるまで境内の真ん中で待避でした。



着工から10日間庫裡や玄関、坪庭のあったところは何も無くなり、広々とした空間が現れました。

基礎

起工式が済むと建て方に向け基礎を作るための作業が急ピッチで始まりました。



←丁張(ちようはり)雪の中を測量器に傘を差しての作業でした。

地盤調査→
1mより下はグリ石ばかり、
大変良好な地盤です。



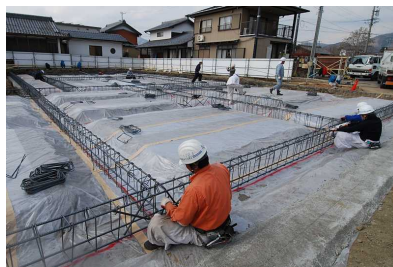
地盤改良セメントタフロック3Eが56トン運び込まれ、基礎面2.5m深さの土に混ぜ合わされました。基礎の下はカチンカチンのコンクリート状態になっていました。



地盤改良が始まって10日目、いくつもの土俵のように整地され、防湿ポリエチレンフィルムが一面に張り巡らされていきました。



2月21日日曜日、休日返上で2人の監督さん墨出し作業です。
この線をたどってゆくと庫裡の輪郭がわかりました。



基礎鉄筋は13トンの鋼材が使われ、10人以上の職人さんによって2日間で完成、頑丈な地中梁と基礎面全体は鳥籠のような風景でした。



起工式から24日、ベタ基礎の鉄筋型枠も完成しコンクリート打ちが始まりました。



ベタ基礎には生コン車34台169㎡のコンクリートが使われました。



鉄筋の鳥籠は広いコンクリートフロアに変わりました。あれだけあった鉄筋が布基礎分僅かとなりました。



布基礎は5日間かけ木製型枠でガッチリ作られ、コンクリートが流し込まれました。



生コン車が来ると必ずサンプルを取り検査、安心です。



基礎天端には黒いドミノのような基礎パッキンが敷かれ、桧の土台が据え付けられます。



3月15日土台ができると大玄関も曳屋され、あるべきところへと落ち着きました。

建て方始まる



3月18日大屋根を支える14mの地棟(じむね)に小里設計士さんが硯(すずり)を持ち住職が揮毫(ごう)しました。



棟梁(とうりょう)が見守るなか御名号や日付などが書き上げられました。



3月19日の朝は職人さんが集まり本堂に向かい合掌し建て方がはじまりました。



建て方最初は大広間部分の通柱に梁がセットされ建てられていきます。



若いお大工さんは不安定な梁の上でも自在に作業されています。



8mの大断面集成材の梁はレッカーに吊られ何度も宙を舞っていました。



2階部分を支える大断面の梁は90cm間隔に仕込まれていきます。



2日がかかりで納められた28本の梁が52畳の空間をしっかり支えています。



建て方2日目、大黒柱や化粧丸柱を建てる作業がはじまりました。



玄関上がり端の框(かまち)と鴨居(かまい)も建て起こされました。



朝から何台ものトラックで材木が大量に運び込まれ駐車場は貯木場でした。



4日目、2階部分の柱が大量に立てられていきました。



7日目玄関のケヤキ虹梁(こりょう)が組み立てられます。



玄関建ておこしは冷たい菜種梅雨の中の作業になりました。



向拝造りの玄関は慎重にクレーンを操作しながら基礎石ぴったりと納まりました。



2階の地棟も据えられ1週間の作業が終わりました。



建て方8日目、大屋根の下地を作る作業が始まりました。



駐車場で組み立てた小屋組がチョウチョのように大空を舞っていました。



幅12尺5重の小屋組が2階の大屋根として運ばれ据え付けられていきます。



2日間の作業で小屋組が完成し家らしくなってきました。



母屋(もや)が取り付けられ大屋根の姿をイメージできるようになりました。



破風(はふ)が青空にブーメランのように舞い取付が始まりました。



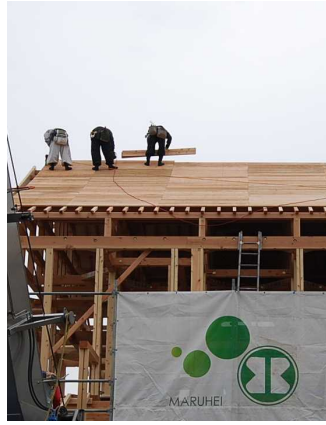
大屋根妻の破風が付けられ米杵葉の美しい曲線が現れました。



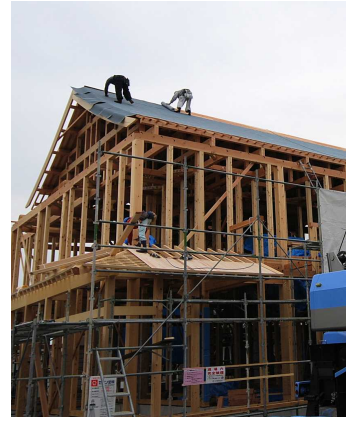
屋根には垂木(たるき)がならび200坪総二階の巨大な屋根の姿になりました。



屋根の剛性を高めるため9ミリの合板を敷きます。



合板の上には15ミリの杉板を敷きつめます。



最後にルーフィングが敷かれ雨の心配が無くなりました。



反った大屋根の先端は二重の垂木で作られます。



テコの原理を使ったハネ木工法で屋根の先端を持ち上げます。



茅負(かやおい)裏甲(うらご)小裏甲がのせられ三段構えの美しい軒先になりました。



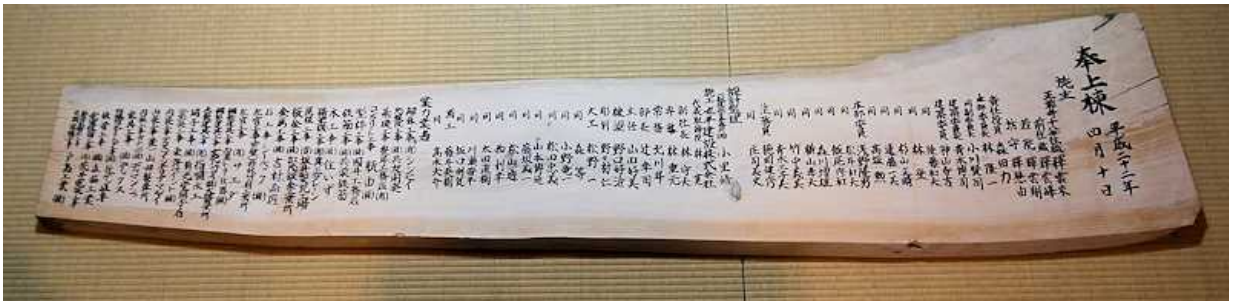
ハネ木の上に母屋が置かれ垂木が並んでいきます。



小屋組作業12日目優美な曲線の反り屋根が完成しました。



建方21日目大屋根仕舞(しまい)も終わり上棟式を待つばかりとなりました。



上棟式の棟札は寺山の桧を板にしたもので、寺族・役員・施工関係者・協力会社、75名の肩書きと氏名が住職の手で書き込まれました。



上棟式会場は120名の参列者がゆったり座れるように廊下や会議室にもイスを並べ、往来できるよう階段も付けられました。



式次第

上棟の儀

・槌打ちの儀（大屋根が見える外に移動します）
 ・古歌
 ・棟札奉納

閉式の辞（青木副委員長）
 合掌礼拝

祝詞（休憩・会場設営）

開式の辞（小川副委員長）
 合掌礼拝
 三奉請（三木正司） 導師（住職） 焼香
 表白（小川副委員長）
 讃仏偈（住職）

短念仏
 廻向（住職）

合掌礼拝
 住職法話
 合掌礼拝

・坊守・本部委員長・副委員長
 ・設計管理者（小里設計士）
 ・施工者（丸平建設社長）
 ・順次：門徒・建設関係者



開式前には続々と関係者が受付をして木の香薫る庫裡に入ります。



4月10日午前11時 特設荘厳のご本尊前でお勤めが始まりました。



平成22年4月10日には前住職も元気で参列しお焼香をしていました。



勤行のなか参列者全員がお焼香をし上棟を感謝しました。



『上棟の儀』では野口棟梁を介し三人のお大さんにも木槌が渡されました。



「槌打ちの儀」大屋根に登ったお大さんが棟梁のかけ声で屋根を打ち付けます。



丸平建設社長が「古歌」と呼ばれる上棟祝詩を熱唱されました。

『上棟の儀』が終了すると庫裏は祝宴会場に模様替えされ、御祝いの宴席となりました。



「棟札(むなだ)奉納」では天井の滑車から伸びたロープの片方は棟板、も一方は境内まで延ばされ、参列者全員でかけ声とともに天井高く引き上げられました。

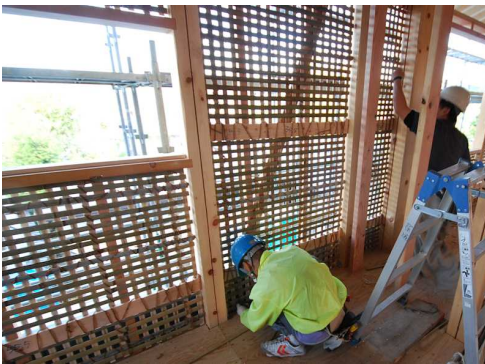




木造耐震を向上させるために壁は全てWの筋交(ずかい)が入っています



横揺れから柱を支える火打梁(ひうちばり)は264本取り付けられています。



壁は伝統的な荒壁、谷汲の若林親方によって丁寧に編んでもらえました。



外塗りは少し厚めにドロを付けてもらえたようです。



筋交い用の金具だけで480枚強力なボルトで固定されています。



全ての火打梁には特別懇志進納者の名前が書き入れられました。



竹は国産真竹、シュロ縄で縛っていく本式の真壁下地です。



腐れドロという数年寝かせ発酵した緑色の土でヒビ割れしないそうです。



4月13日から屋根工事が始まりました。棧葺という土を使わず屋根を軽くする工法です。



葺師は養老の村上屋根工事店、お寺の屋根専門で全国を回ってみえます。



絵になる仕事ぶりの田中葺師は全国技能グランプリ1位のスーパ職人さんです。



五月晴れの青空に映えるいぶし銀の葺(いらか)が現れはじめました。



屋根瓦は岐阜市琴塚の坂井製瓦で、本堂と同じで美濃一のブランドです。



葺き始めから一月で大屋根部分の平瓦が葺きあがりました。



高さ11mの天辺に絶妙な角度で鬼瓦が据えられます。



6月30日2ヶ月半を要し美しい姿の瓦屋根が完成しました。



瓦が葺き上がった6月25日、大屋根妻の木連格子(きづれごし)が取り付けられました。



天井裏に光が差し込むのもあと少しの間になりました。



室内でお大工さんが米ヒバの角材を原寸に合わせて作ります。



窓を開け屋根の上を破風妻はぶ封まで運んでいきます。



二枚の木連格子が合体し妻壁に納められました。



破風(はふ)に付ける懸魚(けぎょ)の大きさを原寸図で決めます。



住職の希望で図面より二回り大きくなりました。



彫刻師の手で仕上げられた品の良い懸魚です。



お彼岸の9月21日棟梁の手で大屋根三ヶ所の懸魚が取り付けられました。



下から見ると小さいですが、実際はかなり大きなものです。



旧庫裏の鴨居(かもい)がカンナ仕上げをされ運び込まれました。



かつての座敷に使われていた鴨居2本を合わせ一枚の床板に加工されました。



45cm幅で厚さ12cmの立派な板は飴色の光沢を放っています。



ホゾ穴を木口で埋め旧庫裏の面影を残しています。



2階の飾り棚床板として美しい木目で再生しました。



1階廊下は12cm巾から材料変更した18cm巾の桧無垢板が貼られました。



フローリングは縁板と相殺の材料変更でしたが、檜材の無垢板で貼ってもらえました。



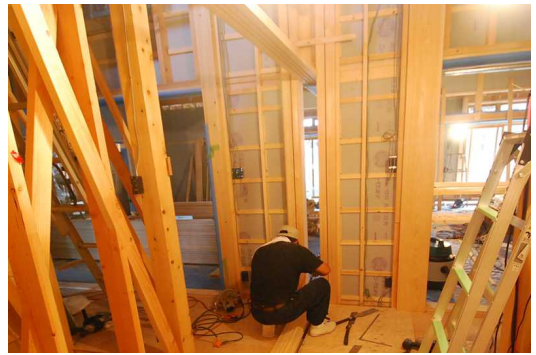
幅60cm長さ6m厚さ5cmケヤキ無垢板の上がり框(かまち)踏板が取り付けられました。



幅80cm長さ3.5m厚さ4cmケヤキ無垢の玄関ホール床間板、木目の向きを相談しました。



大広間の収納襖、4間の鴨居(かもし)が下がったら厄介、工夫してもらいました。



広間から廊下を越えてスムーズに収納、壁のまん中に穴が開けられています。



鴨居を固定する吊束(つりか)の中心に長い穴を開け、そこへ2階の床からボルトを通して固定します。



2階座敷の下と納戸に吊束調整ボルトヘッド隠れています。



大工のカキ氷屋さん、職人さんの休憩は楽しそうです。



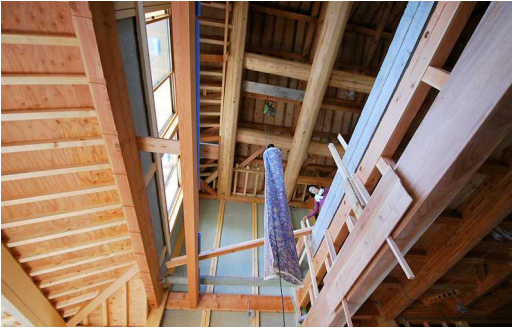
玄関ホールは150号絵画の自走式収納飾り床、なかなかのアイデアです。



飾り床間に絵が引き立つよう、桧で額縁を作ってもらいました。



7枚の絵画を収納できるようにフラッターールが配置してあります。



高さ10mの玄関吹き抜けは垂木やハネ木が複雑に組み合わさっています。



天井裏のまん中には耐火壁が造られ、その前に棟札が固定されています。



大広間の仏間は京都の鷲見仏具店が軸回り扉で制作しました。



仏間内部の金紙は京都の表具屋さん貼ってもらいました。



建て方から8ヶ月、足場が撤去され玄関吹き抜けに格子が取付られました。



11月10日造作終了お大工さんの作業終了記念写真です。



内部廊下は木造和風の雰囲気強調するため、珪藻土(はいそうど)の左官仕上げです。



玄関吹き抜けは左官仕上げで壁とキャットウオークの対比がモダン風になりました。



厨房土間部分の給排水は使い勝手を考え配置されました。



土間の表面は滑り止め骨材の入ったポリウレタン樹脂でお化粧してもらえました。



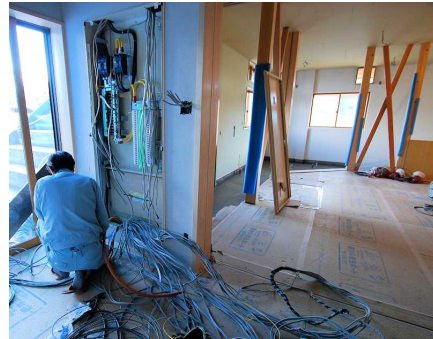
壁やフードはすべてステンレスでレストランの厨房のような雰囲気です。



80Lと55Lのガス回転釜が据えられると給食センターのようになりました。



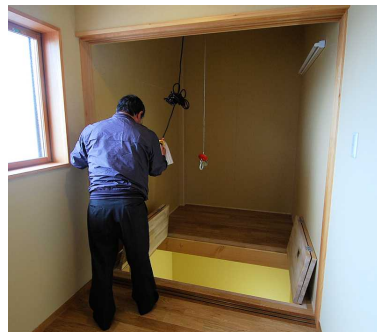
広間のメイン電灯40wが30本も使われていますがHf蛍光灯で節電だそうです。



配電盤はたくさんのコードが集まり30kVAの電気を振り分けています。



2階の住宅部分は外階段を付けますが景観を損なわない設計になりました。



2階の納戸は踏天井で床が開閉しウインチが活躍するエレベーターホールです。

平成22年12月15日完成引渡がされました。



5寸勾配の反り屋根で景観と総二階208坪の床面積で機能を合わせもった壮大優美な庫裡会館になりました。



大玄関の奥には手洗棟を増設し安心してお参りできるようになりました。



修復された大玄関正面廊下は門信徒画廊になり門徒の絵画で賓客をもてなします。



中庭は明るくすっきりと仕上げてもらいました。正尊寺総代で後藤造園親方だった後藤和夫氏の遺作となった庭です。



2階からの眺めも考えRCの防火棟屋根は箱庭風に仕上げました。



広々とした玄関ホールは重厚かつ多目的に使えるよう仕上がりました。



開放的な待合は靴を脱がずにゆっくり話のできる部屋になっています。

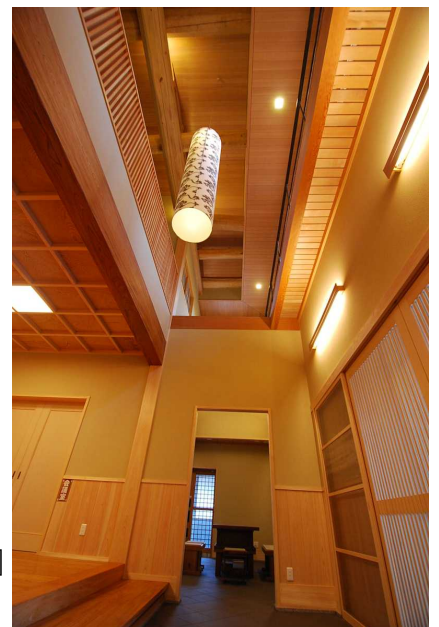


52畳の大広間を仕切る襖は壁や廊下を越え簡単に格納でき、格調ある仏間座敷でありながら多目的ホールへの模様替えも簡単です。



玄関吹抜は二階の住職坊守とお客さんが対面会話できるようリビングに小窓がついています。

巨木の地棟が見える吹抜玄関は京都唐長『天平大雲』の襖紙で仕立てた照明が足元を照らします。





2階には8畳間が3部屋並んだ和室があり法
要などでお座敷になります。



床の間は違い棚を造らず『南蛮七宝文様』の
唐紙でアクセントを付けています。



2階のリビングルームも地棟が見えるよう天
井を貼らず開放的に仕上げられました。



旧庫裏の鴨居で作った棚のある2階踊り場
にも住職姉の絵が飾られています。



42畳の厨房は柱と耐震筋交いだけで壁を
塗らず開放感ある仕上がりになりました。
22畳の板間には作業台兼用のIH式アイラ
ンドキッチンが置かれています。



20畳の土間部分は様々な行事に対応で
きる厨房機器の配置になりました。



前任職は庫裡完成一月前、新庫裡で暮らすことなく平成22年11月12日享年93才で往生しました。本葬は庫裡が完成引渡後の12月20日、多くの門徒と縁者が集い執りおこなわれました。



葬儀開始式前、住職・若院・坊守・本部委員・建築委員が勢揃いでの写真が撮ることができました。



前任職の葬儀を縁に大勢の門徒が完成直後の庫裡を見ることができました。



大広間はスクリーンで本堂の葬儀式を映すサテライト会場になりました。



葬儀終了後大広間では役員と寺親戚が200名集い三十五日の法要をお勤めしました。



法要後テーブルが並べられ会食、この葬儀で200人規模の行事がスムーズにできることが実証されました。

庫裡は仏間座敷としてホールとして様々に利用されています。



報恩講のお齋(どき)場



永代経開闢(かいびやく)法要のお齋座敷



親子お経教室のお楽しみ



キッズサンガおやつ作り



年忌法事会場



お葬式会場



研修会々場



音楽演奏会ホール



ライオンズクラブ法要例会々場



企業セミナー会場



宗祖讚仰作法（音楽法要）

親鸞聖人七五〇回大遠忌法要では、いままでの声明を中心としたお勤めだけでなく、西洋音楽的要素を加味した「宗祖讚仰作法 第三種（音楽法要）」が制定されました。

このおつとめは、伝統的な「十二礼の節」による「正信念佛偈」をおつとめし、エレクトーンと雅楽による繰り返しのメロディー伴奏で「和讚」と「念仏」を唱和します。

回向文は昔歌っていた『恩徳讚』で、旧譜といわれ時々歌われることがありましたが、このお経では「願以此功德」の代わりの回向句で唱われます。耳に残り覚えやす、誰もが一緒に歌えるメロディーの音楽法要です、音譜を見ながら一緒におつとめしましょう。

- 一、宗祖御消息
- 二、頂礼文
- 三、表白
- 四、正信念佛偈
- 五、和讚、念仏

- 和讚（二首）
- 念仏（四句）
- 和讚（二首）
- 念仏（四句）
- 和讚（二首）
- 念仏（十二句）
- 六、回向文
- 七、宗祖御消息

宗祖御消息拝読

弥陀の本願と

まふすは

名号を

となへんものを

極楽へ

むかへんと

ちかはせ
ふかく信しひたるを
めてたきことにて候なり
となふるか

頂礼文

南無帰命頂礼

南無帰命頂礼

極楽能化 弥陀如来

極楽能化 弥陀如来



な-も き-み(7) ちよ-(7) ら-い



な-も き-み(7) ちよ-(7) ら-い



ご-く ら-く の(7)け み-だによら



ご-く ら-く の(7)け み-だによら い

正信念佛偈

歸命无量壽如來同音な南无不可思議光

法藏菩薩回位時さいせ在世自在王佛所

親見諸佛淨土曰こくど國土人天之善惡

建立无上殊勝願ちようほつ超發希有大弘誓

五劫思惟之攝受じゆうせい重誓名聲聞十方

普放无量无边光むげむ无寻无對光炎王

清淨歡喜智慧光ふだんなん不斷難思无稱光

超日月光照塵刹いっさい一切群生蒙光照

本願名號正定業しん至心信樂願為曰

成等覺證大涅槃ひつし必至滅度願成就

如來所以興出世ゆいせつ唯說彌陀本願海

五濁惡時群生海おうしん應信如來如實言

能發一念喜愛心ふだん不斷煩惱得涅槃

凡聖逆謗齊迴入にょしゆ如衆水入海一味

攝取心光常照護いのち已能雖破无明闇

貪愛瞋憎之雲霧じようふ常覆真實信心天

譬如日光覆雲霧
雲霧之下明无闇

獲信見敬大慶喜
即横超截五惡趣

一切善惡凡夫人
聞信如來弘誓願

佛言廣大勝解者
是人名分陀利華

弥陀佛本願念佛
邪見憍慢惡衆生

信樂受持甚以難
難中之難无過斯

印度西天之論家
中夏日域之高僧

顯大聖興世正意
明如來本誓應機

釋迦如來楞伽山
爲衆告命南天竺

龍樹大士出於世
悉能摧破有无見

宣說大乘无上法
證歡喜地生安樂

顯示難行陸路苦
信樂易行水道樂

憶念弥陀佛本願
自然即時入必定

唯能常稱如來號
應報大悲弘誓恩

天親菩薩造論說
歸命无寻光如來

依修多羅顯眞實
光闡横超大誓願

廣由本願力迴向
爲度群生彰一心

歸入功德大寶海
必獲入大會衆數

得至蓮華藏世界
卽證眞如法性身

遊煩惱林現神通
入生死菌示應化

本師曇鸞梁天子
常向鸞處菩薩禮

三藏流支授淨教
焚燒仙經歸樂邦

天親菩薩論註解
報土回果顯誓願

往還迴向由他力
正定之回唯信心

惑染凡夫信心發
證知生死卽涅槃

必至无量光明土
諸有衆生皆普化

道綽決聖道難證
唯明淨土可通入

萬善自力貶勤修
圓滿德號勸專稱

三不三信誨慇懃
像末法滅同悲引

一生造惡值弘誓
至安養界證妙果

善導獨明佛正意
矜哀定散與逆惡

光明名號顯回緣
開入本願大智海

眞 <small>しん</small> 宗 <small>しゅう</small> 教 <small>きょう</small> 證 <small>しょう</small> 興 <small>こう</small> 片 <small>へん</small> 州 <small>しゅう</small>	本 <small>ほん</small> 師 <small>し</small> 源 <small>げん</small> 空 <small>くう</small> 明 <small>みょう</small> 佛 <small>ぶつ</small> 教 <small>きょう</small>	煩 <small>ぼん</small> 惱 <small>のう</small> 鄣 <small>しょう</small> 眼 <small>げん</small> 雖 <small>すい</small> 不 <small>ふ</small> 見 <small>けん</small>	極 <small>ごく</small> 重 <small>じゅう</small> 惡 <small>あく</small> 人 <small>にん</small> 唯 <small>ゆい</small> 稱 <small>しょう</small> 佛 <small>ぶつ</small>	專 <small>せん</small> 雜 <small>ざう</small> 執 <small>しゅう</small> 心 <small>しん</small> 判 <small>はん</small> 淺 <small>せん</small> 深 <small>じん</small>	源 <small>げん</small> 信 <small>しん</small> 廣 <small>こう</small> 開 <small>かい</small> 一 <small>いち</small> 代 <small>だい</small> 教 <small>きょう</small>	與 <small>よ</small> 韋 <small>い</small> 提 <small>だい</small> 等 <small>とう</small> 獲 <small>ぎやく</small> 三 <small>さん</small> 忍 <small>にん</small>	行 <small>ぎょう</small> 者 <small>じゃ</small> 正 <small>しょう</small> 受 <small>じゆ</small> 金 <small>こん</small> 剛 <small>ごう</small> 心 <small>しん</small>
選 <small>せん</small> 擇 <small>じやく</small> 本 <small>ほん</small> 願 <small>がん</small> 弘 <small>くわ</small> 惡 <small>あく</small> 世 <small>せ</small>	憐 <small>れん</small> 愍 <small>みん</small> 善 <small>ぜん</small> 惡 <small>まく</small> 凡 <small>ぼん</small> 夫 <small>ぶ</small> 人 <small>にん</small>	大 <small>だい</small> 悲 <small>ひ</small> 无 <small>む</small> 倦 <small>けん</small> 常 <small>じょう</small> 照 <small>しょう</small> 我 <small>が</small>	我 <small>が</small> 亦 <small>やく</small> 在 <small>ざい</small> 彼 <small>ひ</small> 攝 <small>せつ</small> 取 <small>しゅ</small> 中 <small>ちゅう</small>	報 <small>ほう</small> 化 <small>け</small> 二 <small>に</small> 土 <small>ど</small> 正 <small>しょう</small> 辨 <small>べん</small> 立 <small>りゅう</small>	偏 <small>へん</small> 歸 <small>き</small> 安 <small>あん</small> 養 <small>りやう</small> 勸 <small>かん</small> 一 <small>いつ</small> 切 <small>さい</small>	卽 <small>そく</small> 證 <small>しょう</small> 法 <small>ほつ</small> 性 <small>しょう</small> 之 <small>し</small> 常 <small>じょう</small> 樂 <small>らく</small>	慶 <small>きやう</small> 喜 <small>き</small> 一 <small>いち</small> 念 <small>ねん</small> 相 <small>さう</small> 應 <small>おう</small> 後 <small>ご</small>

げん かい しょう じ りん でん げ け ち き じょう い しょ し

そくに じやく じょう む いらく ひつち しん じん い のう に けう

ユルク
ぎき だい じ じゅう しょう さい む へん ごく じやく あい

どう-ぞく じ しゅう ぐ どう しん

ゆい か しん し ———— こ—うそ—うせつ

道 <small>どう</small> 俗 <small>ぞく</small> 時 <small>じ</small> 衆 <small>しゅう</small> 共 <small>くわ</small> 同 <small>どう</small> 心 <small>しん</small>	弘 <small>くわ</small> 經 <small>きやう</small> 大 <small>だい</small> 士 <small>し</small> 宗 <small>しゅう</small> 師 <small>し</small> 等 <small>とう</small>	速 <small>そく</small> 入 <small>にゅう</small> 寂 <small>じやく</small> 靜 <small>じやう</small> 无 <small>む</small> 爲 <small>い</small> 樂 <small>らく</small>	還 <small>げん</small> 來 <small>らい</small> 生 <small>しやう</small> 死 <small>じ</small> 輪 <small>りん</small> 轉 <small>てん</small> 家 <small>け</small>
唯 <small>ゆい</small> 可 <small>か</small> 信 <small>しん</small> 斯 <small>し</small> 高 <small>こう</small> 僧 <small>そう</small> 說 <small>せつ</small>	拯 <small>じやう</small> 濟 <small>さい</small> 无 <small>む</small> 邊 <small>へん</small> 極 <small>ごく</small> 濁 <small>じやく</small> 惡 <small>あく</small>	必 <small>ひつ</small> 以 <small>ち</small> 信 <small>しん</small> 心 <small>しん</small> 爲 <small>い</small> 能 <small>のう</small> 入 <small>にゅう</small>	決 <small>けつ</small> 以 <small>ち</small> 疑 <small>ぎ</small> 情 <small>じやう</small> 爲 <small>い</small> 所 <small>しよ</small> 止 <small>し</small>

和讃・念佛

和讃（二首）

同音

十方ぼうじつ微塵みじん世界せかいの

念佛ねんぶつの衆生しゆじやうをみそなはし

摄取せつしゆしてすてざれば

阿弥陀あみだとなづけ たてまつる

次第に速く



じつ ぼん(7) みじん せ かいの



ねんぶつ(7)のしゆじや(7)を みそなわし



せつ しゆ しーて すてざれば



あみだとなづけ たてまつる



ぼん(7)にまなこ さえられて



せつ しゆのこ(7)みじ(7) みざれども



だいひ ものうき ことなくて



つねに わがみを てらすなり

煩惱ぼんのうにまなこさへられて

摄取せつしゆの光明こうみやうみざれども

大悲だいひものうきことなくて

つねにわが身をてらすなり

念佛(四句)

南 ^な 无 ^も 阿 ^あ 弥 ^み 陀 ^だ 佛 ^{ぶつ}	南 ^な 无 ^も 阿 ^あ 弥 ^み 陀 ^だ 佛 ^{ぶつ}
南 ^な 无 ^も 阿 ^あ 弥 ^み 陀 ^だ 佛 ^{ぶつ}	南 ^な 无 ^も 阿 ^あ 弥 ^み 陀 ^だ 佛 ^{ぶつ}

な もあ み だ なも あみ-だ ぶ つ

な もあ み だ なも あみ-だ ぶ つ

和讃(二首)

自 ^じ 然 ^{ねん} の ^{じよう} 浄 ^{じよう} 土 ^ど に ^じ いた ^じ る ^じ な ^じ れ	な ^じ が ^じ く ^じ 生 ^{じよう} 死 ^じ を ^じ す ^じ て ^じ は ^じ て ^じ 、 ^て	金 ^{こん} 剛 ^{ごう} の ^{しん} 信 ^{しん} 心 ^{じん} ば ^じ か ^じ り ^じ に ^じ て	五 ^ご 濁 ^{じよく} 悪 ^{あく} 世 ^せ の ^わ れ ^ら こ ^そ
--	--	---	---

ごじよく あくせの われらこそ

こんご(?) のしんじん ばかりにて

ながく しゃ(?)じを すてはてて

じねんのじよ(?)どに いたるなれ

弥^み陀^だの本^{ほん}願^{がん}信^{しん}ずべし

本^{ほん}願^{がん}信^{しん}ずるひとはみな

撰^{せつ}取^{しゆ}不^ふ捨^{しゃ}の利^り益^{やく}にて

无^む上^{じやう}覺^{かく}をばさとるなり

mf
みだの ほんがん しんずべし

ほんがんしんずる ひとはみな

せつ しゆ ふしゃの りやくにて

むじよ(7) かくをば さとるなり

念佛(四句)

南^な无^も阿^あ弥^み陀^だ佛^{ぶつ}

南^な无^も阿^あ弥^み陀^だ佛^{ぶつ}

f
なもあみだ なもあみだぶつ

なもあみだ なもあみだぶつ

和讃(二首)

同音
弥陀だの回向えこう成就じゆじゆして

往相おうそう還相げんそうふたつなり

これらの回向えこうによりてこそ

心行しんぎやうともにえしむなれ

みだの えこ(?) じよ(?) じゆして
お(?) そ(?) げんそ(?) ふたつなり
これらのえこ(?) に よりてこそ
しんぎよ(?) ともに えしむなれ

弥陀だ大悲だいひの誓願せいがんを

ふかく信しんぜんひとはみな

ねてもさめてもへだてなく

南无阿弥陀佛なむあみだぶつをとのなふべし

みだ だいひの せいがんの
ふかく しんぜん ひとはみな
ねても さめても へだてなく
なもあみだぶつを と(?) べし

な もあみ だ なもあみ-だぶつ

な もあみ だ なもあみ-だぶつ

な もあみ だ なもあみ-だぶつ

な もあみ だ なもあみ-だぶつ

な もあみ だ なもあみ-だぶつ

な もあみ だ なもあみ-だぶつ

南な 南な 南な 南な 南な 南な
 无も 无も 无も 无も 无も 无も
 阿あ 阿あ 阿あ 阿あ 阿あ 阿あ
 弥み 弥み 弥み 弥み 弥み 弥み
 陀だ 陀だ 陀だ 陀だ 陀だ 陀だ
 佛ぶつ 佛ぶつ 佛ぶつ 佛ぶつ 佛ぶつ 佛ぶつ

念佛(十二句)

によらい だいひの おんどくは

みをこに してもほ(?)ずべし

ししゅ ちしきの おんどくも

ほねを くだきても しゃーすべし

ほねを くだきても 謝しゃすべし

師し主しゅ知識ちしきの恩おん徳とくも

身みを粉こなにして も報ほうずべし

如にょ来らい大だい悲ひの恩おん徳とくは

回向文

宗祖御消息拝読

この身は

いまは

としきはまりて

さふらへは

きためて

さきたちて

往生し

候はんすれば

浄土にて

かならず
かならず

まちないらせ

さふらふへし



正尊寺御絵伝
第4軸第6図 聖人御本廟の図

弘長二年十一月二十八日（旧暦）、現在の暦では一二六三年一月十六日、京都の善法坊（現在の角坊）において、親鸞聖人はお念仏のうちにお浄土へ往生されました。

九十年におよぶご生涯は、まさに苦難の道でした。

しかし、弥陀の本願を信じ念仏に生かされることによつて、それがそのまま真実の白道であったのです。

この大遠忌法要をご縁に、私たちもお聴聞に励み、親鸞聖人が歩まれた往生浄土の道を聴き開いてまいりましょう。

私たちには「まちないらせせうろうべし」といわれる世界が待っているのです。

※このページの写真加工トリミング、お任せします。

正尊寺の活動行事に参加しましょう

美濃四十八座 真宗講座

年5回の公開講座

お仕事のある方でも参加できるよう夜のお座もあります。
出席スタンプをためると回数に応じ表彰しています。



日曜学校

毎週日曜日午前8時から40分。
春には京都旅行、夏休みにはサマースクールが待っています。



キッズサンガ親子お経教室

毎月第3金曜夜7時～8時半まで
お経や作法の練習、仏さまのお話も親子一緒に聴きます。
毎回楽しいおやつ作りもします。



仏教壮年会

毎月第2日曜午後8時から例会、
お経の練習と今は歎異抄について学びます。
年1回現地学習と懇親のため一泊旅行もします。



仏教婦人会活動

様々な行事に参画しています。

か だん かい 加談会

本部委員のOBで組織されています。
報恩講などの行事にはいつも参加です



正尊寺の活動行事はホームページやBlog
でご紹介しています。

<http://www.shosonji.or.jp>

しょうそんじ

検索





大遠忌法要奉賛会

奉賛会長 森田 力(責任役員)

法要委員長 林 隆一

法要副委員長 小川賢司

法要本部委員 青木博司

法要本部委員 浅野隆男

法要本部委員 松井和夫

法要本部委員 林 英夫

法要本部委員 高坂 勇

法要本部委員 杉山正晴

法要本部委員 浅川正碩

法要本部委員 高井 勲

法要本部委員 竹中義美

法要本部委員 青木三子夫

建築委員

建築委員 後藤 和夫

建築委員 神山 春吉

建築委員 林 登

建築委員 遠藤 一美

建築委員 高坂 勲

法園山正尊寺

親鸞聖人七五〇回大遠忌
庫裡新築落慶 法要記念誌

発行日 平成二十四年四月二十八日

編集

正尊寺第十八代住職 杉山雲来

発行

正尊寺大遠忌奉賛会

岐阜県本巣市曾井中島一五九二

〒五〇一-二二〇五

電話 〇五八一-三四二〇一八

印刷製本

共和印刷株式会社

岐阜市折立柿添三七一一

表紙絵

本巣市辻屋

小川 堯 氏

—裏表紙—

